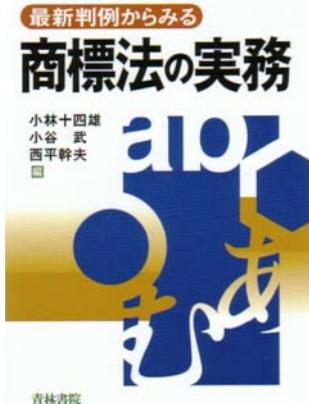


書籍紹介



『最新判例からみる
商標法の実務』
小林十四雄・小谷武・西平幹夫 編
青林書院 発行
A5版 394頁 4,095円（税込）

本書は、「最新判決を通して商標実務を学ぶ！」ための良書であって、本書を読むことによって、以下の効用が十分期待できます。

- 実際の取引社会ではたす商標の機能と有用性がわかります。
- 裁判事例から紛争解決と予防の実践的対策を知れます。
- 最新判例が体系的に紹介され現代的課題や判例動向が読みとれます。
- 弁護士・弁理士・企業実務家の解説で商標の多面性が理解できます。

本書の執筆者達は、現在知的財産権の第一線で仕事をなされており、判例を学ぶことの重要な認識を共通にされておられる専門家です。

本書は、平成10年以来最近8年間の商標関係の事件を中心に、それ以前の重要な判決にも触れられ、全体で194の判決を取り上げられています。これらを通じ、読者は商標の問題が経済社会の変化に応じて、如何に変遷しているかを実感されることでしょう。

本書では、以下の3部構成からなっています。

第1部「最近の商標事件判決例の傾向」

第2部「商標実務ゼミナール」

第3部 座談会「判決を見る三つの眼」

第1部では、判決に流れる歴史的考察を通して最近の動向を知るという意味で、最新の傾向が概観されています。

第2部では、総論と各論を分けて、問題点を「商標と識別性」から「並行輸入」まで7つのテーマに分類し、各テーマ毎の総論において、そのテーマの本質的議論が心掛けられています。

第3部では、座談会を行ない、弁護士・弁理士・企業のそれぞれの立場から、徹底的に各ケースに付き議論されています。

(パテント編集委員：佐藤 富徳)

From Editors

編集後記

パテントの特集原稿が集まってからは、師走の忘年会の真っ最中で、酔いを醒まして原稿査読を済ませましたが、パテント1月号を手にしている今は、亥年の新春を迎えたばかりで、新年会真っ最中ですが、やはりほっと安堵の思いです。

そして、今年誓ったことも色々思い出しています。パテント誌を少しでも良くすることも今年誓ったことの一つです。さて、編集が終わって、パテント誌が発行されたのも嬉しいものですが、特集に対する読者の反響を知り、分析できたならば、さぞかし、喜びも倍増するのにと思っている次第です。

(Tom Toc)

今回は、ご投稿、ご発表、ご挨拶等、多くの方々のお力により、私がほとんどなにもしない間に1月号ができあがってしまいました。深く、感謝いたします。

(N. J.)

初めてパテント誌の編集に携わって、裏方さんの苦労を知りました。これからは、パテント誌をちゃんと読まねばと思いました。

さて、今回の特集である「知的財産価値評価」は、今後、弁理士業務において重要度が増してくると思われます。この特集が契機となり、知的財産価値評価業務にかかる弁理士が増えることを願っています。

(S. N.)

今月号の特集は、「知的財産価値評価」でした。私は予てから、価値評価の業務は、今後弁理士が活躍し得る潜在的ニーズが最も大きな業務の1つではないかと感じておりましたので、非常に興味深く原稿の査読をさせていただきました。

ただ、これまで、価値評価の業務は、日常の出願や中間処理をはじめとする事務所内の基本的な業務とは若干かけ離れているようなイメージを持っておりましたが、今回の特集内容を見るに、価値評価の業務のうちで特に弁理士に期待されている事は、日常の弁理士としての基本的な業務の積み重ねの延長線上にある事を強く感じました。やはり、まずは日々の業務を誠実に遂行していく事が今後の礎となる事を改めて感じながら、少々やる気を増しつつ日々の業務に向かっている今日この頃です。

(H. T.)

次号予告【2007年2月号】

特集《聞いてみたかった知財部のヒミツ》

企業の知財部の方々にアンケート調査を実施しその調査結果を掲載するとともに、ヒット商品に学ぶ知財戦略について等、企業の知財戦略を中心に掲載します。ご期待ください。